顔面島

前編

清水鱗造

灰皿町

夏が終わるころ、多肉(たにく)ちゃんが「そのうちビロンガ島に行かない?」と蕪留(ぶりゅう)さんを誘ってきた。多肉ちゃんがベランダで育てている多肉植物のエリンチェムが自然の状態で生えている様子に憧れていて、写真に撮ってきたいということだった。

エリンチェムという植物の花は奇態なもので、蕪留さんは多肉ちゃんの部屋のベランダで見せてもらったときに初めて知った。エリンチェムの花は、爪のある五本の指のようなつぼみが肌色の手のひらに似た多肉質の台から伸びだす。

「ビロンガ島か。メソカシアには一度行ってみたいと思っていたので、行きたいね。お供するよ。今週で仕事の区切りがつくので、来週以降ならば」と蕪留さんは言った。

「よかった。蕪留さんと一緒に行けるなら心強いわ。飛行機の予約をするわね。来週半ば以降の便の席を取るわ。一週間ぐらいの旅になるかな」と多肉ちゃんは言って、二人で旅する計画が成立した。

ビロンガ島は熱帯だが、少し乾き気味の気候のようだ。たくさんの多肉植物がビロンガ島では見られる。たとえば道端の草に交じって耳のような肉厚の葉で、真っ赤な花が咲く種類の多肉植物などがある。多肉ちゃんと蕪留さんの住むアパートのある街の園芸店で売られているような多肉植物が、ビロンガ島では珍しくない。

エリンチェムはビロンガ島の砂漠地域と海浜地域にまたがって、岩の近くなどに生え

ているという。多肉ちゃんの持っている『多肉植物図鑑』では、巻頭にある自然状態で育つ多肉植物の写真ページに掲載されている。多肉ちゃんの植物趣味は高じてきていて、ここ数年は休暇に植物を見に旅をするのが楽しみになっている。蕪留さんも多肉ちゃんほどではないが、生物観察は好きなほうだ。好きな植物を写真に撮る旅ならば蕪留さんの趣味に合う。

蕪留さんは仕事の後、ビロンガ島の地図を机上に開いて空港の位置などを見た。地図で見ると、人間の顔のような形をしている。こめかみにあたるところに空港があり、目のところは池、鼻は小高い山になっているようだ。両頬の部分に平地がある。ビロンガ島は通称「顔面島」と呼ばれている。鼻の穴の部分に地下洞窟の入口があったり、その穴が地下で耳の穴のところに通じていたりして、地図上だととても記憶しやすい地形だともいえる。顔形の凸凹と照応するところに、山や谷がある。とはいうものの、実際歩くときには顔の形であるということはわからないだろう。顔の表面を歩いていることになるから、大きすぎてわからない。上空から俯瞰すれば立体的な顔の形になっていることがわかる。

旅行ガイド本などでは、飛行機から写したビロンガ島の全景がたいてい表紙になっている。それも、衛星写真だとくっきりと人の顔の形でだんだん近づくと眉などの黒い部

分は森林であることがわかり、鼻の部分は切り立つ崖のように見えてくる。
　蕪留さんは旅の計画は多肉ちゃんに任せておいて、その計画どおりに楽しめばいいと思った。とりあえずは、毎日仕事の後に少しずつリュックサックに旅の荷物を入れていこうと、メモ用紙に必要なものを列挙した覚書を作っておいた。
　夜になって多肉ちゃんから、インターネットでビデオチャットに呼び出された。パソコンで音楽を再生していると、右上の枠に多肉ちゃんの顔が映り、「今、ちょっと話せる？」と言う。「大丈夫だよ」と言って音楽のボリュームを下げると、
「あしたの夜、ちょっと来ない？　ビロンガ島行きの作戦会議」
　と誘われた。
「いいよ。チケット取れましたか？」
　と蕪留さんが聞くと、取れたとのこと。
「四泊ぐらいね。ホテルも取ったわよ。よさそうなところ。ただ三日目からは山のほうに行く予定なので、そこから山小屋という感じのホテルに移動かな」
　と言って、ホテルのウェブサイトへのアクセスリンクを文字情報で送ってきた。そのとき多肉ちゃんは猫のミュウルを抱き上げた。向こうのモニタには蕪留さんが映っている。すでに懐いているので、画面に向かって猫パンチ姿勢で足を上げているようだ。肉

球が見えた。
「ミュウルは連れていくのは無理かな。大家さんのオヤジさんに預けるつもり。ときどき預けているので、ミュウルも馴れているの」
「そうだね。ミュウルちゃん」
と画面に映るミュウルに猫撫で声で呼びかけると、小さい声でニャーニャー鳴いている。
「まあ、持ち物は普通の旅行なのでほぼ定番で決まっているけどね。カメラは二台、望遠レンズとマクロレンズを付けたものでいいわね。ビロンガ島の人たちはのんびりしているので、乗り物の発着時刻はあまり厳密ではないらしい。だいたいの移動地点を決めておく感じね」
「なるほど。ビロンガ島は、地図を見るとほとんど顔の形なのでわかりやすいね」
という話をして、翌日の夜、二階の多肉ちゃんの部屋に行くことになった。また少し調べていると、顔の形の口の部分に当たる細長い池に名物の「顔面魚（フェースフィッシュ）」ともいわれる魚がいるらしい。顔面島におあつらえ向きに顔面魚がいるとはおもしろいと思う。
翌日、アパートの向かいのコンビニで買い物をしているときに多肉ちゃんと出会ってあいさつした。

ると感じる。

蛾のコーナーから通路を進むと、研究室のような造りの一角に顕微鏡が置いてありメソカシア語で「ご自由に覗いてください」と貼り紙があった。顕微鏡の簡単な使い方が書いてあったので覗いてみることにした。接眼レンズには白いシールが貼ってあり、横に置いてあるシャーレから茶色い液体をスポイトで取って薄く塗るように指示がある。

「これは何だろうね。この島全体が一定の趣向に沿っているような気もするけど」と蕪留さんが言うと、多肉ちゃんが「私が先に見てみるわね」と言った。

「あれ、これは。ちょっとやりすぎじゃないかしら?」

と、多肉ちゃんは苦笑しながら声を上げた。「え、なにかすごそうだね。僕も見てみるよ」と蕪留さんは笑って言い、続いて覗いた。

そこには少し予想されたものだが、確かに閾値を超えるようなものがうごめいていた。手袋の形の微生物が泳いでいる。ゾウリムシの動きに似ているが、手袋の形が握ったり開いたりするところが違う。そのままじっと見ていると、よくできたCGのようにも見えた。極微まで「こだわりの球」が磨かれていると思う。

「多肉ちゃん、これはすごいね。

明日、エリンチェムの『手の絨毯』や葉脈草も見られるし『顔面魚』も見られるけど、